6．体験学習プログラム　～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、NPO・NGO 団体が実施する海外のスタディツアーの中から採択した、学生にとって学びの多い4プログラムを実施しました。

また、海外に比べて費用面でも参加しやすい国内プログラムでは、地域のさまざまな課題に目を向け視野を広げる内容で、本学の専任教員が企画･引率するものを1プログラム、センターのボランティアコーディネーターが地域の団体と協力して企画するものを1プログラム実施しました。

全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、報告会を通じてプログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会となるだけでなく、報告会に出席した学生が次回のプログラムの参加を考えるきっかけになっています。

	プログラム企画者・団体	行　先	テーマ	実施日時・期間	人数
国内	ボランティア・ NPO 活動センター	滋賀県高島市	人と人、人と自然 ～エコツーリズムを通して「つながり」を学ぶ～	2019年 2月22日（金）～ 2月25日（月） 4日間	15名
	社会学部　教授 筒井のり子	福島県福島市、 南相馬市、浪江町、 郡山市	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～	2019年 2月19日（火）～ 2月23日（土） 5日間	15名
海外	認定 NPO 法人緑の地球 ネットワーク（GEN）	中華人民共和国	黄土高原スタディツアー 中国緑化協力の旅	2018年 8月25日（土）～ 8月30日（木） 6日間	4名
	ウータン・ 森と生活を考える会	インドネシア共和国	ボルネオ島エコツアー 森の中でのホームステイ	2018年 8月25日（土）～ 8月31日（金） 7日間	4名
	NPO 法人環境保全ネットワーク京都	台湾	学生、市民と歩く台湾エコツアー	2019年 3月1日（金）～ 3月6日（水） 6日間	5名
	NPO 法人 JIPPO	スリランカ民主社会主義共和国	歴史と暮らしに触れる旅 ～手づくり紅茶とホームステイ～	2019年 2月21日（木）～ 3月1日（金） 9日間	5名

○国内体験学習プログラム／滋賀県高島市【春季】

■参加学生	
大島　菖瑚（農学部　食料農業システム学科　4年次生）	山元　樹（理工学部　環境ソリューション工学科　2年次生）
山下　翔平（社会学部　社会学科　2年次生）	石川　秀凱（社会学部　現代福祉学科　2年次生）
澤　　優希（社会学部　現代福祉学科　2年次生）	田井　拓暉（社会学部　現代福祉学科　2年次生）
辻　　翔太（社会学部　現代福祉学科　2年次生）	正中　菜帆（社会学部　現代福祉学科　2年次生）
川村　有希（政策学部　政策学科　2年次生）	高山　　優（経済学部　1年次生）
堤　　花成（社会学部　現代福祉学科　1年次生）	平井　美来（社会学部　現代福祉学科　1年次生）
橋本奈津子（農学部　食料農業システム学科　1年次生）	ヤールオール エリフ（農学部　食料農業システム学科　1年次生）
橋本　実紅（短期大学部　社会福祉学科　1年次生）	
■テーマ	
「人と人、人と自然　～エコツーリズムを通して『つながり』を学ぶ～」	
■協力団体　高島市役所	
マキノ自然観察倶楽部　　結いの里　椋川　　滋賀県漁業協同組合連合会　他	

■行　程　2019年2月22日（金）～2月25日（月）　4日間

日　時	時　間	活動内容	場　所
2月22日（金）	8：00	JR 京都駅八条口出発	マキノ高原／在原地区 白浜荘
	9：30	白浜荘到着、荷物下ろしてすぐ出発	
	10：30	マキノ到着、オリエンテーション	
	12：30	昼食・休憩	
	14：00	スノーシュー体験	
	17：00	マキノ出発	
	18：30	夕食	
	20：00	一日のふりかえり	
	21：00	入浴・就寝	
2月23日（土）	7：30	朝食、ミーティング	おっきん椋川交流館 白浜荘
	9：00	椋川・地域住民から依頼された作業	
	11：00	昼食作り（地域の方に教えてもらいながら）	
	12：00	昼食・休憩	
	13：30	わら細工体験ワークショップ他	
	18：30	夕食	
	20：00	一日のふりかえり	
	21：00	入浴・就寝	
2月24日（日）	7：30	朝食、ミーティング	マキノ町海津地区 白浜荘
	9：30	マキノの取り組み紹介など	
	11：30	昼食・休憩	
	13：00	子どもたちと海津のまち歩き・意見交換	
	18：00	夕食	
	19：30	一日のふりかえり	
	20：30	入浴・就寝	
2月25日（月）	7：00	朝食、ミーティング	三和漁協 安曇川世代交流センター
	8：30	三和漁港　漁船乗船、漁業見学、漁業の話等	
	10：00	琵琶湖の漁業についての話、調理体験	
	12：30	昼食（試食）・休憩・漁師との交流	
	14：00	4日間のふりかえり後、安曇川出発	
	18：00	JR 京都駅八条口到着、解散	

大島　菖瑚
（農学部　食料農業システム学科　4年次生）

私の住んでいる地域は高齢化や人口減少が進んでいて、これらの課題を解決するために他の地域ではどのような取り組みでまちおこしをしているのか以前から興味がありました。高島市の国内体験学習プログラムに参加することでまちおこしのヒントが得られると考え、参加しました。

今回の国内体験学習プログラムに参加して一番印象に残ったのは、一部の観光名所だけに力を入れるのではなく、地域全体の良さをアピールする取り組みが行われていたことです。私はこのプログラムで、高島市で有名なメタセコイア並木をはじめ、マキノの大自然を活かしたスノーシュー体験や椋川の伝統ある木割り体験、海津地区の散策や琵琶湖のえり漁見学など高島市の様々な魅力を体験させていただきました。一部の観光名所だけでは、訪れた人はそこだけを見て帰ってしまい、地域のまちおこしとしての効果は薄いですが、地域全体を活用することでその地域全体を知ってもらい、より、地域の魅力に気付くことができます。高島市ではフットパスを取り入れ、マキノのフットパスにはメタセコイア並木以外にも絶景スポットや隠れた名所を訪れてもらうプログラムが組み込まれていました。

まちおこしはその地域の歴史や伝統、観光名所を活用するだけではなく、身近な自然や地域全体を活用することで訪れた人だけでなく、そこで暮らす地域の人がその魅力に気付けるのだということを学びました。

椋川での木割り体験の様子

山元　樹
（理工学部　環境ソリューション工学科　2年次生）

私は、エコツーリズムには様々なかたちがあることを知り、それぞれの地域に合うかたちを見つけることの重要性を学んだ。マキノでは、豪雪で通行止めになることが問題だが、その一方でスノーシューを体験することができる。椋川では、木炭づくりなど昔ながらの文化が残っているが、炭需要の減少に伴う仕事不足や文化継承の担い手不足の問題がある。このように、同じく過疎高齢化の問題を抱える地域でも状況は様々だ。実際に解決策を考えてみたが、私たちが移住したいと思える案が出せず、地域課題に取り組む難しさを痛感した。

また、今回の体験で特に印象に残っていることがある。一つは、豊かさとは何かというお話をしたことだ。何でも手に入る都会の豊かさと、自然にあふれ、人とのつながりが濃い田舎の豊かさのどちらを重視するのかは人それぞれで、様々な考え方があることを学んだ。

もう一つは、漁師さんが水環境を考慮して取り組まれている、森の環境保全活動のお話だ。漁師さんの熱意に触れ、様々な事例を環境対策の観点だけで捉えるのではなく、地域やそこに関わっている方々の視点も持った上で深く考えられるようにしたいと思った。

漁師さんや高島市役所の方々とお話をしている様子

山下　翔平
（社会学部　社会学科　2年次生）

ボランティアについて良いイメージを持っていなかったため、申込みを迷っていたが、興味があったエコツーリズムを直接学ぶ機会であったので、参加を決意した。

私は、学内の他のプロジェクトで、民間の企業に提案する形で地域活性化を目指すという活動に参加していた。しかし、その企業の担当の

方から話を聞く限りでは、熱意を持って地域を活性化させたいという意思を感じることができなかった。しかし、今回の高島市での国内体験学習プログラムの協力者の一人であるマキノ自然観察倶楽部の谷口さんは全く違っていた。谷口さんがこれまでに活動してこられたこと、活動するために必要な膨大な量の知識を持っておられることが、四日間を通してひしひしと伝わってきた。それらから感じた高島市への熱意が、ボランティアでしかできないことがあると身を持って理解させてくれた。これは、今回の国内体験学習プログラムで得た物の1つに過ぎないが、貴重な体験ができたと思う。

マキノ自然観察倶楽部の谷口さんのお話を伺う

石川　秀凱
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

私が高島市での国内体験学習プログラムで特に印象に残っていることは、2日目に訪れた椋川と3日目に訪れた海津での体験でした。椋川では木割りとわら細工の体験を通して産業の移り変わりについて学び、モノづくりへのこだわりや昔ながらの生活文化継承といった点に魅力を感じました。海津ではフットパスについて学び、まち歩きをしました。説明がなければただの石垣も、地域の歴史を知ったり、案内していただくことで、その石垣やまちがとても魅力的に見えてきました。

今回のプログラムではこの他にも様々な貴重な体験をさせてもらい、今まで自分の中になかった新たな視点を得ることができました。地域の魅力や課題、そしてまちづくりを考えるには、まず、その地域についてよく知ることが大切だと感じました。よく知るためには、多角的な視点で地域を見て、考える必要があります。そういった多角的な視点でのまちづくりを担う一員になりたいと思います。

治めている藩によって石垣の作られ方が少し異なっている

澤　優希
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

私は春季国内体験学習プログラムにおいて、滋賀県高島市を訪れました。高島市は滋賀県の北西部に位置し、琵琶湖と里と山が近く、自然豊かな地域です。観光で人気のメタセコイア並木があり、琵琶湖八珍と呼ばれる湖魚が琵琶湖の伝統的なえり漁などによって漁獲されています。また、高島市では高齢化率が34.8％と高齢化が問題となっています。そのため今回のプログラムの中で定住人口や交流人口を増加させる取り組みについてもお話を聞くことができました。

私は将来、福祉に携わる仕事をしたいと考えています。私は福祉に携わる人間は多角的な視点を持つ必要があると考えています。福祉を勉強している学生が自然に関しての知識や考えを持つことは将来役立つと思います。今回の高島市でのプログラムを通して、人間は自然の中に生きているんだということを実感しました。この経験を今後も活かしていきたいと考えています。

わら細工体験の様子。自然の中で生きていることを実感したひとつ

田井　拓暉
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

国内体験学習プログラムに参加し、特に、2日目の椋川での活動が印象に残っている。木割り体験やわら細工体験、地域住民の方との交流などを行った。椋川の方とお話しをするまで、田舎は閉鎖的な場所だと思っていた。しかし、椋川の方たちは閉鎖的どころか、自宅を活用したイベントを開催するくらいとても開放的であった。椋川は一例にすぎないが、田舎という勝手なイメージで捉えるのではなく、実際に行って見て聴いて体験することが大切だと感じた。

私はこのプログラムを通して「自分の目で確かめる」ことの大切さに気づいた。百聞は一見にしかずということわざがあるように、現場へ足を運び、直接見たり関わったりすることで得られる気づきや、見えてくる本質があるのだと思う。聞いて知ったつもりになるのではなく、気になったことに対して行動できる人になりたいと思う。

おっきん椋川交流館　地域の人や訪れた人の交流の場となっている

辻　翔太
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

この国内体験学習プログラムでの四日間を通して一番印象に残っていることは、人によってものの見方に違いがあることです。スノーシュー体験では、普段見ることが出来ない雪景色を見ることができ、大阪で生活している私にとっては、雪はとても魅力的に見えました。しかし、高島市の住民にとっては、大雪になると交通障害や家の屋根や窓が壊れる原因になったりと、どちらかというと邪魔な存在であるという話を聞きました。同じ物や同じ出来事でも、捉え方、感じ方が立場によって全く異なるのだということを目の当たりにしました。

また、私は大学で福祉を学んでおり、住民の高齢化や担い手不足などについては勉強していて知っていることでした。しかし、椋川やマキノの住民の「住んでいる人が高齢化している」「働き手である若い人が少なくなっている」などのことばは、講義で聞くよりも非常に重みがあるものでした。そういう生の声を聴ける良い機会となりました。

初日のスノーシュー体験にて。例年に比べて雪はあまり積もらなかったらしい

正中　菜帆
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

今回、この春季国内体験学習プログラムに参加した理由は、出身である山口県のまちと高島市の雰囲気が似ていたこともあり、田舎や自然というものをプラスに活かしていくために、どのような取り組みが行われているのかを知りたいと思ったからである。

事前学習会では、写真などで見る風景がとてもきれいだったのもあり、魅力がいっぱいなまちという印象をもった。しかし、過疎化などの課題が前面に出され、その魅力と正反対のような気がして、不思議に思っていた。それが、実際に高島市に行ってみて考えが変わっていった。実際に見て聞いて感じた時に、魅力と課題が表裏一体になっているのだと思った。もちろん魅力もたくさんあるものの、その裏には課題があった。例えば雪も、雪が珍しい人には魅力に感じるが、生活をしている人にとっては、雪かきや交通障害など、生活上の課題となる。人が今いる立場によって感じ方やとらえ方が違うのだと感じた。

まちづくりでは、課題を魅力と捉えられるような視点が必要なのではないかと思った。

1日目のスノーシューにて。暖冬のため雪は少なかったとはいえ見たことのない量の雪だった

川村　有希
（政策学部　政策学科　2年次生）

高島市は自然が多く、私が住んでいるまちとは景色や建っているものが大きく異なり、「住んでいる人は不便ではないのか」という疑問がありました。4日間で多くの方のお話を聴く機会がありましたが、「不便」という言葉はあまり強調されていませんでした。住んでいるまちに対しての不満より、住んでいるまちの魅力や人の魅力が強く伝わってきて、地元への愛着を持たれている方が多いという印象を受けました。私は椋川での住民同士のつながりや雰囲気を見ていて、都市のように「モノ」が充実しているかどうかだけで便利、不便の基準を計っていたことに気づきました。椋川には、人や自然、まち自体に温かさがありました。温かさやつながりがあるから、便利でなくても住民にとっては住みやすいまちなのではないかと思いました。

私が住む地域は、便利な「モノ」があふれ、近隣住民の関係が希薄なことが課題です。「モノ」以外の魅力を見つけ、人の交流があるまちづくりを考えていきたいと考えるようになりました。

自分の住んでいる街並みとは違い、自然にあふれ高い建物が無い景色。おっきん椋川交流館前

高山　優
（経済学部　1年次生）

この体験学習プログラムで、僕はエコツーリズム活動について初めて知った。スノーシュー体験、木割り、豆腐作り、わら細工、琵琶湖で捕った魚をさばく体験など全てが楽しく、魅力的なものだった。

だが、そこで大きな問題も見つけた。圧倒的な人手不足である。高島市に入ってくる人が少なければ、残る人も少ない。エコツーリズム活動を通して人を呼び寄せることはできても、定住するまでにはなかなかいたらない、労働条件がよい働く場が少ないため人が出て行くといったことが特に深刻な問題だと感じた。地元の子どもや若者に魅力を伝える活動をもっと増やせば改善するのではないかと思ったが、人手が足りていないこの状況で活動を増やすことは難しい。解決策をみんなで考えたが、現実的な考えは思いつかなかった。

エコツーリズムについて学ぶことを通し、自分の無力さにも気づいた。今後、他のエコツーリズム活動も体験し、学びを深め、課題解決に関する多角的な視点を持って、的確な意見を出せる人間になりたいと思った。

漁師や市役所職員との意見交換

堤　花成
（社会学部　現代福祉学科　1年次生）

私は今回の高島市での国内体験学習プログラムに参加し、多くの人と関わることで学んだことがある。それは何事も多くの人の知恵と協力によってできているということである。

フットパスの取り組みでは、どのような道にするのかを考えたり環境整備をしたりと地域の人の協力が必要であり、多くの人が関わってフットパスのマップができたことを知った。フットパスを作ることで住んでいる人たちは地

域の魅力を再確認でき、観光客は歩くことでその魅力を知ることができる。とても良い取り組みだと思った。

また、地域住民がその地域の魅力に気付けば、それを若い世代や子どもたち、そして訪れた人たちに魅力を伝えることができる。一人ひとりが当事者となり、多くの人と意見を交換し、考え、行動することによって新しいアイデアが生まれ、変化が生まれるのではないかと考える。そのために今回のプログラムに参加した私たちが当事者として魅力を伝えていきたい。

フットパスの取り組みについて聞いている様子

平井　美来
（社会学部　現代福祉学科　1年次生）

高島市での国内体験学習プログラムは、高島市のことを学習するだけではく、自分の住んでいる地域についても改めて考えさせられる、とても貴重な体験になった。

私が住んでいる地域は、過疎化、高齢化がすすみ、高島市と似た状況にある。高島市や私が住んでいる地域は、私にとって住むには不便なところである。しかし、その不便さや、田舎ならではの暮らしの魅力を知ってもらう、ファンを作るという点では、高島市は交流人口を増やす努力をしていると感じた。そこには地域の人の協力が必要であり、高島市は、地域の人も積極的にまちおこしに関わっている印象を受けた。地域住民を巻き込む努力を重ねてこられたからだと思う。

4日間の活動を通して、ただの観光ではなく、このプログラムに参加にしたからこそ、様々な角度から高島市を見ることができたと思う。魅力はもちろん地域が抱えている課題やその解決に向けての取り組みなど、高島市の内側まで見ることができる貴重な体験になった。

椋川の地域の人にわら細工を教えてもらっている写真

橋本　奈津子
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

高島市での国内体験学習プログラムに参加して、いろいろな角度から高島を見て体験し、様々な魅力や課題を発見することができました。そして魅力や課題を発見するためには、その地域についてよく知ること、直接見て聴いて考えることが大切だと思いました。

高島市の一番の魅力は、地域のつながりが強いところだと思います。椋川の地域の人々のつながりの強さは、お話の中から伝わってきました。また、海津地域を案内してくださった民生委員の小多さんがされている、小学生にカヌーを教えるというような地域でのつながり方もあることを知りました。いろいろな形のつながりがあることを学びました。その一方で、少子高齢化、移住定住問題など、解決することが難しい課題がたくさんあります。今回の学びをこのまま終わりにするのではなく、また高島市を訪れ、高島市と関わりを持ち続けたいと思います。そして、また新たな視点を持って、課題の解決策を発見していけたらと思っています。

民生委員の小多さんより、カヤックの取り組みについてのお話を伺っている

ヤールオール　エリフ
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

高島市での体験学習を終えて、まず、高齢化を実感する事ができた。実際に高齢化が進んでいるまちは、空き家が多いなど、また別の課題もあった。地域によっては高齢化率が70パーセントのところがあるということを知り、とても驚いた。高島市では、高齢化や過疎化を解決する一つの方法として移住者を増やそうとの取り組みが行われているが、話を聞いている中で、職が少ないことや地元の人たちと移住者の価値観の違いにより、移住者が増えにくいのではないかと感じた。

そのような課題がある一方で、高島市の魅力も感じることができた。出会った人たちがみんな生き生きされていて、とても楽しく体験できた。また、漁師の方々が琵琶湖の環境保全のために森林整備活動をされたり、地域全体でエコツーリズムやフットパスに取り組んでいたり、自分達の住む地域を良くしようと前向きな活動がたくさんされていることが、とても素敵だと思った。この素敵な活動を伝えていきたい。

琵琶湖のえり漁の様子

橋本　実紅
（短期大学部　社会福祉学科　1年次生）

今回の国内体験学習プログラムに参加して、様々なことについて考え、学びましたが、特に人とのつながりと高齢化について学びを深めることができました。

高島市は、人と人のつながりが強い地域だと感じました。特に、訪れた椋川では地域の方同士が協力し、声をかけあって生活されているようでした。これまで、高齢化について話は聞いていましたが、あまり現実味がなく、実感がありませんでした。しかし、具体的な数字を聞いたときに、驚いたと同時に非常に現実味を帯びてきて他人事ではないように思えました。どのようにしたら誰もが過ごしやすいまちがつくれるのかを考えるきっかけになりました。暮らしやすいまちづくりには、地域住民と医療、福祉、そして行政の連携が大切だと思います。福祉の視点からの暮らしやすいまちづくりについて、詳しくし学びたいと思いました。そして地元に貢献したいと思います。

椋川の方に教えてもらいながらのわら細工体験

○国内体験学習プログラム／福島県【春季】

■参加学生	
藤原　　純（文学部　哲学科　4年次生）	日野萌絵子（法学部　法律学科　4年次生）
西山　大樹（政策学部　政策学科　4年次生）	米本　圭吾（経済学部　現代経済学科　3年次生）
村井　伶至（経営学部　経営学科　3年次生）	池水　大輔（文学部　日本語日本文学科　2年次生）
田中　利奈（経済学部　現代経済学科　2年次生）	加田　絢美（理工学部　物質化学科　2年次生）
朝倉　勇人（社会学部　現代福祉学科　2年次生）	井上　開登（社会学部　社会学科　2年次生）
大橋　寛海（社会学部　現代福祉学科　2年次生）	宮野　優人（社会学部　現代福祉学科　2年次生）
太田　有里（社会学部　社会学科　2年次生）	杉浦　　唯（政策学部　政策学科　2年次生）
大屋晴太郎（農学部　食料農業システム学科　1年次生）	
■テーマ、企画・引率教員	
福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～ 社会学部教授　筒井　のり子	

■行　程　2019年2月19日（火）～2月23日（土）　5日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
2019年 2/19 （火）	8：00	京都駅八条口出発	ホテル京阪グランデ前に集合
	18：50	福島市着	ユースゲストハウス ATOMA・泊
	19：00～20：00	夕食	
	20：00～21：30	うつくしまブランチの皆さんのお話	
2/20 （水）	8：30	宿を出発	
	8：50～9：30	阿部農園訪問	阿部農園の梨畑
	10：20～10：30	浪江町へ移動	道の駅　川俣（トイレ休憩）
	11：40～12：55	浪江町着・昼食休憩	なみ・まち・まるしぇ
	13：00～14：40	浪江町内を地元住民（小林さん）の案内で視察	
	15：30～17：00	デイさぽーと　ぴーなっつの青田さんのお話	南相馬市民情報交流センター
	18：00	いちばん星着・ふりかえり	農家民泊　いちばん星・泊
	19：00	夕食	
	20：00	いちばん星プロジェクトのスタッフによるお話	
2/21 （木）	8：00	さくらサロンでの出し物の練習	
	9：15	宿を出発	
	9：45～12：00	南相馬市小高区のさくらサロンを訪問し、交流	小高老人福祉センター
	12：00～13：00	昼食休憩	カフェいっぷくや（小高区役所内）
	13：00～16：00	南相馬市社会福祉協議会のお話	小高交流センター
	17：00	いちばん星着・ふりかえり	農家民泊　いちばん星・泊
	19：00	夕食	
2/22 （金）	9：00	宿を出発 観光ボランティアの案内で南相馬市内を視察	農家民泊　いちばん星
	12：00	昼食休憩	叶や
	13：30～14：30	小高ワーカーズベース和田さんのお話	小高パイオニアヴィレッジ
	15：00～	郡山温泉へ向かう。国道6号線（沿岸部）を南下	
	17：40	郡山温泉着・ふりかえり	郡山温泉
	19：00	夕食・入浴	
	21：00	郡山温泉発	車中・泊
2/23 （土）	8：00	京都駅八条口着・解散	ホテル京阪グランデ前
	8：15	深草キャンパス着・解散	深草キャンパス

藤原　純
（文学部　哲学科　4年次生）

私が福島スタディツアーに参加したきっかけは、福島の復興の様子を自分の目で見て確かめたいと思ったからです。そして、参加して自分で知ろうとする大切さを改めて学べました。きっかけは、小高区のさくらサロンで聞いたおばあちゃんの震災当時のお話です。そのおばあちゃんの持つ優しい雰囲気と、震災当時のお話の恐ろしさのギャップに、私はすごく混乱したことを覚えています。震災当時のお話を聞いて、おばあちゃんが震災を乗り越え前向きに生きているとても強い人であることを知りました。知ろうとせずにいたら、こんなに強く生きている人たちを風評被害や放射能汚染の偏見によって心無い言葉を知らず知らずのうちにかける側になってしまっていたのかもしれません。このことを通して、自分で知ろうとする大切さに改めて気づけました。

小高区さくらサロンにて。出し物のあと、お話をしました

西山　大樹
（政策学部　政策学科　4年次生）

私は昨年のスタディツアーで福島の問題に関心を持ち、福島に関連する本を読んだりした。複雑にいろんなものが絡み合っていて分からないという思いでモヤモヤしていた。

今年は小高ワーカーズベースの和田さんの話に、私は圧倒された。避難指示により一度人口がゼロになった南相馬市小高区で、次々にビジネスを起こしている和田さんは、「（南相馬市小高区を）10年で5割も戻らない町ではなく、一旦、人口ゼロになったのに5000人に急増した町と見る」と言われた。和田さんも震災前から小高区に住んでいて、元の場所に戻れない悔しさや怒り、想像もできないような喪失感がある中、そのように冷静にとらえてビジネスを展開している強さに私は感動した。福島に限らず社会にある問題について知り考えながらも、今ある状況の中で自分に何ができるのか考え行動していくこと、それが大切だと思った。福島などの被災地の現実をもっと知ること、そして、私の住んでいる大阪でも福島で私が感じたことを小さくても周りに伝えていくことを、実践していく。

国道6号を通過中に目にした帰還困難区域の様子。住宅街に今もバリケードがたくさんある

日野　萌絵子
（法学部　法律学科　4年次生）

今回このプログラムに参加して、特に、「言葉の難しさ」と「福島のことを知っているふりをしていた」という2つが印象に残った。「言葉の難しさ」では「頑張れ」や「忘れない」など何気なく使っていた言葉が人を傷つけていたかもしれないことに気づき、これからは自分の言葉に責任をもって発言していきたいと思った。「福島のことを知っているふりをしていた」では、何度か復興支援ボランティアに参加していたりしたことで震災を知っていると慢心している自分に気づいた。このプログラムで現地の人から直接話を聞いたことで、改めて、震災が未だに尾を引いており、風評被害に苦しんでいる人がまだまだいることを知ることができた。知っているふりや関心を持っている状態だけでとめないように、これからは謙虚に、学び続けていきたいと思った。

宿でプロデューサーの方から話を聴いているところ

米本　圭吾
（経済学部　現代経済学科　3年次生）

私は今回の福島スタディツアーで印象に残ったことが3つある。1つ目は震災に対する強い思いを東北出身者が必ず持っている訳ではないということだ。このことを伊藤光雪さんから聞いた時、私は少し驚いた。震災に対して何かしらの動機を持っていないと、行動を起こそうともしないのは関西に住んでいる私たちと一緒だと感じた。2つ目はトラックとすれ違う場面が多かったことだ。復興による工事が頻繁に行われている証拠だと思うが、更地である所が多く、本当に工事が行われているのか、疑問を持ってしまった。3つ目は現地の方の気持ちを汲み取ろうとしたことだ。自分にとって東日本大震災が身近になったこともあって、現地の人の気持ちを理解したいと考えることが多かった。いろいろな想いを持った人達の気持ちを理解できるように努めていきたいと思った。

福島県内を走行するトラック。平日になるとこのような大型車両とすれ違うことが多い

私は今回の福島スタディツアー限りにせず、これからも福島とつながりを持ちたいと思った。

村井　伶至
（経営学部　経営学科　3年次生）

福島のスタディツアーに参加し多くの方々からお話を伺い、震災当時福島で起こったこと、被災された方々がそれぞれ異なった形で辛い思いをされたこと、一つの視点からだけで簡単に物事を判断せず多角的に物事を見ることの大切さに気付かされた。そして福島の現状とも向き合い、目に見える復興は行われていても人の心など目に見えない部分の復興が進んでいないことも考えさせられた。この目に見えない復興は私の中でもどうすれば復興するのか、本当に結論づけることができない問題であると感じた。震災によってより鮮明になった高齢化などの地域課題。この課題をチャンスとしてビジネスを展開する方。課題を解決するために様々な形でアプローチする人たちをみて福島の今後について楽しみが私の中で生まれた。

浪江町大平山霊園（公園）からの景色。東日本大震災で犠牲になられた方々への慰霊碑がある。ここは少し高台に位置し請戸全体を見渡すことができる場所

今回知り得たことを友人に伝え、福島について知ってもらい、また来る災害に備えるきっかけ作りにしていきたいと考えた。

池水　大輔
（文学部　日本語日本文学科　2年次生）

今回のスタディツアーを通して、自分は何も知らなかったということを何度も思い知らされた。深刻な人手不足や少子高齢化、福島の作物や土地に対する風評被害、無数にあるフレコンバック、またそれの処理が大幅に遅れていることなど、福島は多くの問題に直面している。特に福島の少子高齢化は大きな問題になっている。この問題について(株)小高ワーカーズベースの和田さんは、「震災前からあった問題、震災によって浮き彫りになっただけ」と仰っていた。この言葉を踏まえるならば、私たちは震災が起こる前に、いま福島が直面している「震災前からあった問題」を解決していくことが重要なのではないだろうか。学生である自分にできることは少ないが、周りの人に福島で経験したことを話していくこと、これからも福島を何度も訪れること、そして今の福島を知っていくことが自分にできる復興の一つであると信じている。

浪江駅近くの自動販売機。ペットボトルのデザインや値段が昔のままであった

田中　利奈
（経済学部　現代経済学科　2年次生）

考えれば考えるほど復興とは何か分からなくなり、複雑な気持ちになったプログラムでした。震災前の姿を取り戻したい方や新事業で復興を目指す方など様々な方がおり、復興に向かうにつれてまた新たな課題が発見されるため難しいという印象を持ちました。また、目に見える復興は約8割終わっていますが、目に見えない復興はまだ終わっていないことを知り、目に見えないからといってそのままにしておくのではな

く、目に見える復興と見えない復興を合わせて対策を行っていかなければ、本当の意味での復興には届かないと思いました。

さらに、参加した学生の間で「頑張れ」の意味について考える機会が多かったです。現地で見たどのメッセージにも大きな字で書かれていたり、乱雑な字で書かれていたりして本当に応援をしてくれているのかさえも分からないように思えました。そのため、もう一度この言葉の意味を考える良い機会になりました。

国道6号線にあるコンビニエンスストアの写真です。まだ帰還困難区域であるため、震災後のそのままの状態で建物などが残っていました

加田　絢美
（理工学部　物質化学科　2年次生）

今回は、浪江町と南相馬市小高区の2つの地域での体験をまとめる。

浪江町は、原発の避難解除から2年経った。請戸漁港を訪れた。そこから見える景色は、広範囲に渡り何もなく、土の地面がむき出しだった。漁港付近のこの土地は、津波の影響で地盤が歪み、もう住居等の建築物を建てる事が出来ない。津波は、家も人も何もかも奪ってしまったのだ。次に南相馬市小高区を訪問した。様々な方からお話を伺った。震災の被害の深刻さを改めて知ると共に、多くの避難できなかった高齢者や障がい者がいた事を知った。避難中に亡くなられた高齢者も多く、そういった災害関連死は津波の直接死の約6倍にもなる。全くこの事実を知らなかったので、驚愕した。

小高交流センター　地域住民の方が自由に使える行政の施設　このような新しい建物も次々建設されている

しかし、人々は前を向いている。どちらの地区の人も物事を前向きに捉えていた。震災が起こった事実は変わらない。あの時の記憶は人々の心の中に残り続ける。しかし、それでも、人々は未来に向かって進んでいた。

朝倉　勇人
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

今回のスタディツアーは、昨年の同じ時期に福島県を初めて訪れ、自身が目にした一年前の光景と今の福島県はどう変わったのか、また、出会った方々ともう一度お会いしたいと思い参加させていただいた。率直な感想として、以前と変わらない町並みもあれば、新たに建築された建物も多くある。少しずつ福島県は復興していると感じた半面、住宅や町中に大量のフレコンバックが置いてあったり、生活感が漂う住宅に誰も住んでいない現状。帰還のできない地域、住民の高齢化など、震災の影響は8年たった今でも残っているしこれからも続いていくだろう。私は改めて、東日本大震災のことを忘れず、自分にできることとしてとにかく友人、家族、多くの方に当時の震災のことや、今の自分が見た、聞いた福島県の現状を全てさらけだして伝え、そしてこれからも学び続けたいと思う。それが私のできる復興であると考えている。

ここまで津波が来たという場所に実際訪れ、想像するだけで怖いと思った

井上　開登
（社会学部　社会学科　2年次生）

震災から7年たった今、メディアが震災に関しての情報を報道することが少なくなった。これによって世間の人たちは被災地の復興は済んだものだと考えるだろう。しかし、実際現地は復興したとは言えない状態が続いている。

今回スタディツアーで福島を訪れたことによって私には福島の「今」を伝える義務があると考えている。福島の今を見て、福島に生きる人たちの話を聞いて、福島の地を歩いて感じた現状などをより多くの人たちに伝えていかなければならない。そのためにも今後も福島について考え続けなければならないと感じている。

福島の人々は私たち若い世代に多くの大切なことを教えてくださった。この教えを忘れては

いけないとひしひしと感じている。また、福島で受けた刺激や経験を今後の学生生活に活かすだけでなく、今後の生きる糧にもしていきたい。

汚染土の仮置き場。「復興」と書かれた壁の向こう側にフレコンバッグが山積みにされている

大橋　寛海
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

私は福島県を訪問するのは今回で2回目になります。1回目もこのスタディツアーによるものでした。今回は昨年と比較して今の自分はどのように感じるのかをテーマとして臨みました。

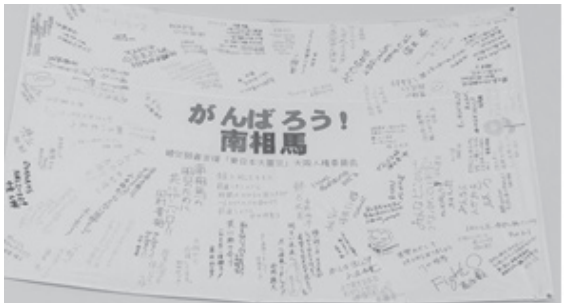
前回の心境としては、福島は他の県と違い原発の被害を受けた被災地で、原発が原因で複雑な現状になっていて、被災者の方は何も悪くないのになぜこんなに苦しい想いをしなければならないのかと思っていました。

そして今年もう一度福島に訪問させていただき、変わったところと変わっていないところがありました。阿部農園や福島の各地で見かけるフレコンバックがそのままであるということと、国道6号線沿いの帰還困難区域が震災当時そのままの状態で放置されているということです。この異様な光景が1年経っても全くのそのままの状態であったという事がとても悲しかったです。私はまた福島に足を運びこれらがどう変わっていくのかを見届けなければならないと思いました。

福島の幸！期間中は毎回の食事を楽しみにしていました！

宮野　優人
（社会学部　現代福祉学科　2年次生）

このツアーを通して、もっとたくさんの知識を得ないと自分の考えを出すことはできないということ、そして東日本大震災で起こったことで落ち込んでばかりでもいられないので、「予測不可能な未来を楽しむ」ということが強く思ったことでした。また、誰からどんな話を聞いたのかによって生まれる偏見の思い。どんな人のどんな意見も全然間違ってはいない事など、東日本大震災について無知だった私はたくさんのことを知りました。これからも多くの知識を得たい、そして自分の中の疑問を自分なりの答えで見つけていきたいと思いました。本当にこのツアーに参加できたこと、身をもって震災の傷跡について感じられたことをよかったと考えています。



みんな書いている「頑張れ」「頑張ろう」「頑張りましょう」被災者は頑張っているのにこれ以上何を頑張るのか

太田　有里
（社会学部　社会学科　2年次生）

今回参加したスタディツアーで2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地である福島を訪問し、報道だけでは知る事の出来ない人々の思いや被災地の現状に触れた。町には通称モニタリングポストと呼ばれる放射線監視装置、廃墟と化した多くの建物、現在も残っている大量のフレコンバック等震災の爪痕が深く根付いていた。阿部農園では、自主的により厳しい基準の放射線量の検査をしてから出荷するという。こうした風評被害は放射線に対して被災地の人々と同じように恐れている他府県の人々が過剰に反応し

浪江町に設置されている放射線監視装置「モニタリングポスト」 放射線量を表示

ている様に見えた。一方で、小高ワーカーズベースの和田さんは、失ったのではなく、白いキャンパスで一から創り出していくチャンスであると捉え、事業を展開し新たな繋がりを生み出す事で希望を見据えていた。元々ある地域課題とどう向き合うか、震災を過去の遺物にするのではなく、現在まで続く課題をどう学び、伝えていくかを自分事の様に考えるべきである。

杉浦　唯
（政策学部　政策学科　2年次生）

今回のスタディツアーでは、様々な立場の視点からお話を伺ったが、立場は違えど、それぞれの考え方や想いの原点にはやはり共通するものがあった。

また、小高ワーカーズベースの和田さんのお話は、地域の活性化や課題解決など、政策学的な部分もあり、政策学部の学生としてとても惹きつけられた。独自の得意分野で攻める“弱者の戦略”の発想であったり、創造的な視点へのリフレーミングやゼロベース思考は、まさに自分たちにとっても必要な視点であると考える。

私は今回初めて福島を訪れたため、誰かの話を聞いた上での比較しかできないが、町も人々も本来の意味で“生き”ようとしているのを感じた。

今回お会いした現地の方々から直接お話を伺うことを通して出会った新たな視点や価値観を活かしつつ、一味違う着眼点をもって、今後様々な課題と向き合っていきたい。そして、きちんと自分の目で比較するためにも、再び福島を訪れなければならないと強く思う。

自転車や歩行者通行禁止の帰還困難区域の看板とそのすぐ側には警備員（国道6号線にて）

大屋　晴太郎
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

私はこのスタディツアーに参加して、東日本大震災は過去のことではなく今のことだと実感しました。未だに帰宅困難区域があり、二年前から避難指示が一部解除された浪江町や小高地区ではまだまだ震災の爪痕が色濃く残っていました。除染作業で出た汚染土などを入れたフレコンバックと呼ばれる袋が大量にある光景は衝撃的でした。町には温度計ではなく放射線量を図る測定器が置いてあり、それだけ放射線という問題は大きいのだと実感しました。また、イメージだけで福島県の食べ物は安全ではないといった風評被害もあります。8年経っても問題がまだまだ沢山ありました。これらの問題を解決するためには我々も一緒になって考えなければなりません。それは過去のことではなく今のことだからです。私は多くの人に東日本大震災ついて考えてほしいと思います。一人一人が真剣に東日本大震災に向き合ってもらいたいです。

放射線量を測る装置

○海外体験学習プログラム／中華人民共和国【夏季】

■参加学生	
田原正太郎（文学部　歴史学科　3年次生）	村井　俊介（文学部　歴史学科　3年次生）
松岡　大輔（法学部　法律学科　1年次生）	
■テーマ、企画団体	
「黄土高原スタディツアー　中国緑化協力の旅」 認定 NPO 法人　緑の地球ネットワーク（GEN）	

■行程　2018年8月25日（土）～8月30日（木）　6日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
8月25日（土）	午前	関西空港　集合 関空9：45→北京12：00	北京市 河北省帳家口市
	午後	バスで帳家口市蔚県へ移動【蔚州飯店泊】	
8月26日（日）	午前	市場見学、蔚県博物館訪問	帳家口市蔚県（うつけん）
	午後	暖泉鎮観光　打樹花、古い町並み見学【蔚州飯店泊】	
8月27日（月）	午前	代王城鎮でマツ植樹	帳家口市蔚県
	午後	蔚州郷土樹木園で記念植樹、湿地見学【蔚州飯店泊】	
8月28日（火）		飛狐峪見学、樹木園に移植する樹木探し、蔚州古城見学 【蔚州飯店泊】	帳家口市蔚県
8月29日（水）	午前	蘇州古城見学	帳家口市蔚県
	午後	バスで北京へ移動【北京21世紀飯店】	
8月30日（木）		北京空港→関西国際空港　解散	北京市

田原　正太郎
（文学部　歴史学科　3年次生）

私は、中国の人々の生活の現状を実際に見て知りたいと思い、このスタディツアーに応募しました。中国では、近年緑化活動が活発に進められています。しかし、単一種類の木を一気に植えているため、多様性や将来の持続可能性に配慮されたものとはいえません。緑の地球ネットワークは、大同市で培った30年以上の植樹の経験を活かし、多様性も意識した植樹活動を実施されており、その現場を見せていただきました。

このスタディツアーで印象に残ったことは、まず蔚県の歴史的文化の素晴らしさです。蔚州博物館での見学では、多種多様な展示品を通して当時の人々の発想の豊かさに驚かされました。また、観光で訪れた明清時代の歴史的建造物、城壁、切り絵、打樹花のような伝統文化はとてもすばらしいものでした。

植樹活動や食事のとき、中国の方々と交流ができ、中国の習慣や文化をたくさん教えていただきました。とても優しく温かい方々でした。植樹活動は環境保全のためだけでなく、日本と中国をつなぐ大きな役割があるのだと実感しました。

アブラマツの植樹の様子。現地の方々と一緒に行った

村井　俊介

（文学部　歴史学科　3年次生）

私は、今回のプログラムを通して自分の中国に対する視野が狭かったことを実感した。ツアーに参加する以前の中国に対する印象は、観光客のマナーの悪さや買い占めなどの報道、政府報道官が日本に関して厳しい論調で発言する映像の印象が強く、あまり良くはなかった。日本と中国は歴史的に深いつながりがあり、経済面や文化面では幅広い交流があることから、このツアーでメディア等からは伝わらないありのままの中国を実感したいと思った。実際に中国を訪れると日本にいて知ることのなかった様々な面が見られた。ツアーを通して印象に残っていることは現地の人々の優しさである。私たちは現地の人と共に植樹活動などの交流をした。その中で出会った中国の人々はとても優しく私たちを迎え入れて下さった。印象の変化は自らの行動次第で変わるということを実感するとともに、何事にも積極的な姿勢を持つことで新しい気づき、発見に出会えるということがわかった。

朝市の様子。午前7時頃だったが多くの人が買い物をしていて活気にあふれていた

松岡　大輔

（法学部　法律学科　1年次生）

私は海外スタディツアーに行くのは初めてだったので、たくさんの期待と不安を抱えて中国に出発しました。行く前は、中国は日本に対して負のイメージを持っていて嫌がられるのではないかと危惧していましたが、実際に現地に行ってみると全く逆でした。現地の方は、好意的に接してくれました。人のやさしさや温かさ、日本との文化、慣習のちがいを肌で感じ、中国の独特な文化を現地で直接学ぶことができました。植樹活動では今までのスタディツアーでたくさんの樹木を植えていて、長年の植樹活動による両国の堅い結びつきを感じました。自分の目で見て、確かめなければわからないことが沢山あるということを経験できたと思います。自分でもここまで充実した旅になるとは行く前は思ってもいませんでしたが、この経験は一生の宝物になると思います。今後は他の地域や違う国に行ってみたいと思っています。この経験を糧に、これからは人により優しくできる人間になるために日々精進していきたいと思っています。

中国の切り絵。歴代の冬季オリンピックのエンブレムが描かれており圧巻の美しさです

○海外体験学習プログラム／インドネシア共和国【夏季】

■参加学生	
藤本　智元（政策学部　政策学科　3年次生）	渡辺　万葉（農学部　食品栄養学科　2年次生）
中山志穂璃（文学部　哲学科　1年次生）	大森　光葉（国際学部　国際文化学科　1年次生）
■テーマ、企画団体	
「ボルネオ島エコツアー　～森の中でのホームステイ～」 ウータン・森と生活を考える会	

■行程　2018年8月25日（土）～8月31日（金）　7日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
8月25日（土）	8：55	関西国際空港集合　搭乗手続き シンガポール経由	ジャカルタ
	19：20	ジャカルタ到着後ホテルへ【Jakarta Airport hotel 泊】	
8月26日（日）	6：40	ジャカルタ→国内線でバンカランブンへ移動	タンジュンパラパン村
	8：00	クマイ港→船でタンジュンパラパンへ移動	
	午後	村についてのオリエンテーション【ホームステイ】	
8月27日（月）	午前	リバークルーズで野生生物観察 アブラヤシプランテーションの見学、アグロフォレストリーについてのレクチャー	タンジュンパラパン村
	午後	タンジュン・プティン国立公園オランウータン保護施設（キャンプリーキー）訪問 オランウータン餌やり見学【ホームステイ】	
8月28日（火）	午前	タンジュン・プティン国立公園での植樹体験 苗作り、植林活動	タンジュンパラパン村
	午後	タンジュンパラパン村　伝統工芸作り体験 カゴ編み、指輪作りなど【ホームステイ】	
8月29日（水）	午前	村の小学校見学、子どもたちと環境学習、授業の見学など	タンジュンパラパン村
	午後	村人との交流【ホームステイ】	
8月30日（木）	午前	タンジュンパラパン出発→クマイ港 市場の散策、昼食	ジャカルタ
	15：15	タクシーでパンカラブン出発	
	16：35	ジャカルタ到着 空港内のホテルへ 【Jakarta Airport hotel 泊】	
8月31日（金）	7：20	空港へ移動	
	9：25	ジャカルタ出発、シンガポール経由で関西空港へ	
	21：35	関西空港到着　解散	

藤本　智元
（政策学部　政策学科　3年次生）

私は、今回のボルネオ島エコツアーに参加し、フィールドに出て現場を見、現地の方のお話を聞いたことにより、地球環境問題がとても身近なものであると感じられるようになり、参加前よりも環境への関心、意識が高くなった。

このツアーに参加した理由は、講義で学んだ熱帯雨林のアブラヤシプランテーション問題や、人間が自然からの恵みとして受け取っている生態系サービス、エコツアーの仕組みを現地に行き自分の目で見て話を聞き学んでみたいと考えたからだ。現地ではアブラヤシプランテーションのとんでもない広さに驚いた。害獣として殺されるオランウータン、開発により移住させられた先住民族、森林火災や農薬の被害にさらされる村人、生活の糧となる生態系サービスなど、さまざまなテーマで生のお話しを聞くことができた。今まで他人事だった地球環境問題は消費国である私たちの問題であるということをまざまざと感じることができた。

村の子どもたちと一緒に植樹活動をした

渡辺　万葉
（農学部　食品栄養学科　2年次生）

日本に帰りたくない、と思うほど充実した楽しい毎日が私を待っていました。村の子どもたちはとてもフレンドリーで、すぐに駆け寄ってきてくれました。最終日には、私の名前と顔を描いたお手紙をくれました。「こちょこちょ」や指相撲などをして毎日、顔が痛くなるくらい笑いました。そんな素敵な村ですが、熱帯林の伐採による環境破壊、森林火災、不安定な労働環境、川の水質問題など、課題は山積みです。私は今回のプログラムをきっかけにこのツアーの主催NGO「ウータン・森と生活を考える会」の会員になりました。自分ひとりでは何も出来なくても、遠くから彼らを少しでも支えられると思うと嬉しいです。

スタディツアーでは感情が揺さぶられることが沢山あります。また、私たちが村にホームステイをすることで村人の現金収入になります。私はこれからも世界の様々な問題に関心を持ち続けて、色んなスタディツアーに参加したいと思いました。

船から見たテングザル。オランウータンやカラフルな鳥も見ることが出来ました

中山　志穂璃
（文学部　哲学科　1年次生）

私は今回のボルネオ島エコツアーを通して、現実の環境問題が如何に複雑なものなのかを痛感しました。インドネシアに行く以前はパーム油のプランテーションだけが環境問題であると思っていました。しかし、実際現地に着くと、パーム油の問題だけでなく金鉱山の採掘による河川の水質汚濁や、生活ゴミの処理が適切に行われていないためにプラスチック製品が道端に放置されている土壌など多くの問題が相互に絡み合っていることを知りました。日本人はインドネシア産のパーム油や木材を輸入しています。その恩恵を受ける私たちには、使う責任や

青年団団長イラさんから植林についての説明と、青年団の植林活動についての説明を聞きました

作る責任が伴うのではないか、そのために自分ができることは何か。多くのことを考えさせられた一週間でした。今回学んだこと、感じたことを糧に日頃からボランティアなど様々な活動に取り組みたいと思います。

大森　光葉
（国際学部　国際文化学科　1年次生）

今回初の海外でのエコツアーに参加して、環境を活かしたエコツアーによる経済効果により、そこに住んでいる村人たちの生活と環境を守り、豊かに生活できるようにするというエコツーリズムの可能性を確信することができた。将来は自分でエコツアーを実施し、村に観光客を呼び込み、今のように村人達がプランテーションで働かなくてもすむように、私がその立役者になりたいと思っている。

この一週間で青年団の人たちや子どもたちと心から打ち解け合うことができた。最高の友がたくさんでき、また会いたいと思う人がそこにいるから、そこで起こっている難しい問題を解決できるように手助けがしたくなる。実際に行ってそこの人たちと交流するからこそ、他人事ではなく自分のことのように思うことができるのだとわかった。

仲良くなった現地青年団の人たちと

○海外体験学習プログラム／台湾【春季】

■参加学生	
大島　菖瑚（農学部　食料農業システム学科　4年次生）	木村　卓真(社会学部　コミュニティマネジメント学科　2年次生)
瀬戸山瑠衣（農学部　食品栄養学科　2年次生）	神田　瑞季（経済学部　1年次生）
守本　暁（経済学部　1年次生）	
■テーマ、企画団体	
「学生、市民と歩く台湾エコツアー」 NPO 法人環境保全ネットワーク京都（EPNK）	

■行程　2019年3月1日（金）～3月6日（水）　6日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
3月1日（金）	10：00	関西国際空港集合	台南市
	12：00	エバー航空 BR181にて関西空港発	
	14：40	高雄着 専用バスで移動 高雄　ハマセン見学、 　旧日本建築とまちづくり、現地 NPO による案内、開設 【日昇大飯店】	
3月2日（土）	8：00	ホテル出発	台南市
	9：00	台南市環保教育園区視察 　リユース、環境教育について学び、意見交換 （現地大学生と同行） 台南の大学生と日台の自然、環境問題について交流、昼食	
	14：00	台江国家公園乗船 　野鳥、マングローブなど自然生態を観察 安平古堡（ゼーランディア城） 夕食後 林百貨店、台南夜市観光【日昇大飯店】	
3月3日（日）	9：00	ホテル出発 国立台湾歴史博物館見学　歴史と環境を学ぶ 官田レンカク生態教育園区視察 　水生植物、野鳥観察 　現地 NPO と自然保護について交流	台南市
	12：00	昼食	
	13：30	烏山頭ダム、八田與一記念館視察 　1930年に完成、日本人技師が嘉南平野を穀倉地帯に変える 台湾でヒットした映画「KANO」の撮影現場訪問 　戦前甲子園で準優勝した台湾代表嘉義農林高等学校がテーマ 【烏山頭湖境度假會館泊】	
3月4日（月）	終日	阿里山へ出発 お茶栽培農家訪問、意見交換 奮起湖で昼食 ホテル到着後、 現地ボランティアによるヒノキ林の散策、森林浴 【阿里山阁大飯店】	阿里山
3月5日（火）	終日	日の出と雲海観察 現地ボランティアとともに森林歩道散策、伐採の歴史を説明 昼食 午後 専用車で台北へ　市内視察【コスモスホテル泊】	台北市
3月6日（水）		台北市内視察	台北市
	13：00	エバー航空 BR180にて台北（桃園）空港発	
	16：25	関西国際空港着 空港にて解散	

大島　菖瑚
（農学部　食料農業システム学科 4年次生）

私は今回の台湾スタディツアーが人生初めての海外でした。初めて日本以外の文化や歴史に触れ、考えの幅をより広げることができた6日間になりました。今回のスタディツアーで特に印象に残った事を2つ紹介したいと思います。

1つ目は台湾の人々の環境問題に対する意識です。「蔵金閣」という施設では、国から環境教育法の認定を受け、廃棄された家具や家財を再利用し販売していました。また、官田レンカク生態教育園区では、レンカクをはじめ野鳥や環境に配慮し、農薬を抑えた里山農業を推進していました。私が日本との違いを感じたリサイクルは、お弁当箱の再利用です。台湾のお弁当箱は金属性で使い終えた後は返却し、洗浄してからもう一度使うというものでした。日本では使い終えた容器は捨てるのが一般的です。このように容器の廃棄量を抑えることで、ゴミの大幅な削減に繋がると感じました。

2つ目に印象に残ったことは、台湾の寺院についてです。台湾の寺院は日本の寺院と異なり多様な神様を一緒に祀っているお寺がよく見られました。龍山寺では、仏教、儒教、道教の神や歴史上の人物も合わせて祀られています。台湾の人々の寛大さや大らかさが寺院に表れているのではないでしょうか。

今回のスタディツアーで初めて海外を訪れましたが、実際に目でみて触れてみないとその国を理解することはできないと実感しました。これからはニュースやネットの情報だけでなく、実際に多くの国へ足を運んでいきたいと思います。

リサイクルのお店、蔵金閣の様子。古い家具や、木材を再利用した彫刻などが置かれていた

木村　卓真
（社会学部　コミュニティマネジメント学科 2年次生）

今回のスタディツアーのテーマは「学生、市民と歩く台湾エコツアー」で、多くの自然や環境に関する場所、さらに歴史や文化に関する場所を巡ることができました。小さい島ながら熱帯から亜熱帯までの幅広い気候を網羅する台湾では、日本では味わうことのできないような体験をいくつもすることができました。中でも、それぞれの気候に分布する多様な植物や野鳥などを見ることができたことが印象的です。また、台湾は50年間に及ぶ日本統治時代の歴史があることから、街に日本人が建てた数々の建物や施設が残っており、日本と非常に深い関係にあることを実感することができました。私はこのツアーを通して台湾を環境という視点からだけでなく歴史や文化、日本との関わりといった様々な視点から捉えることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

レンカクの観察をした官田レンカク生態教育園区にて参加者全員で記念撮影

瀬戸山　瑠衣
（農学部　食品栄養学科 2年次生）

台湾について学んだことで一番興味深かったのは、日本統治時代のことです。日本統治時代に、台湾の鉄道や港を発達させたのは事前に知っていましたが、纏足（てんそく）の文化を終わらせたり、女性の職業の幅が広がるなど女性の地位向上を促進させたりしていたことは初めて知り、日本統治時代が台湾に与えた影響がいかに大きいかを感じました。台湾の人が、日本の植民地だった過去があるにも関わらず親日なのは、日本統治時代に台湾が大きく発展したからだということですが、このことを知りさらに納得することができました。

学ぼうという意識の高い学生達や、知識豊富な大人の方々とツアーを共にすることで刺激を受け、自分のスキルアップのモチベーションと

なりました。今後、今回の海外体験学習プログラムで学んだことに関して知識を深め、考えつづけていきたいと思います。日本はさまざまな外交上の理由から公的には台湾を国家として認めていません。しかし、私たち民間人にはあまり関係のないことです。このツアーをきっかけとして、台湾とより友好的な関係を築いていきたいと思いました。

小さな国台湾ではリサイクルがとてもすすんでおり、段ボール、瓶、電球など、さまざまなものがリサイクルされている

神田　瑞季
（経済学部　　1年次生）

「学生のうちはやってみたいと思ったことはやりなさい」と親に背中を押され、不安を胸にこのプログラムに申し込みました。出発までかなり緊張していましたが、飛行機の中で知り合った台湾人の学生が、私が困っているところを助けてくれ、それからずっと飛行機の中で話していました。彼が英語で話してくれたので私も必死に思いを伝えようと頑張り、コミュニケーションをとることができました。つたない英語でも意思疎通ができることがわかり、言語の違いなんて些細なことなのだと気づき緊張が和らぎました。

台湾に着いてからはとても暑く、やはり日本と気候が全然違うと実感しました。生えている植物も違っており、マンゴーの木を見たときは感動しました。一番楽しかったプログラムはマングローブでの野鳥観察です。たくさん可愛い野鳥が見られましたし、交流した成功大学の学生とも仲良くなれて嬉しかったです。他にもレンカクの生態や阿里山など、台湾の環境について様々なことが学べたツアーでした。

マングローブの野鳥観察で乗船した際の集合写真。
景色がとても美しかったです

守本　暁
（経済学部　　1年次生）

今回のツアーに参加してこれからの学生生活をどう過ごすかの目標ができました。大学に入ったものの何を学ぶべきなのかがわからなかった私は、台湾という特殊な国へ行くことで何かしら学びのテーマをつかみたいと思っていました。実際に台湾へ行き、現地大学生と交流した時、日本の学生との意識の違いにとても驚きました。さらに、台湾の学生は日本についてとても興味を持ち、積極的に会話をしようとしてくれました。台湾の町の雰囲気もとても活気がありエネルギーが溢れていました。台湾では至る所に日本の建物や日本人の銅像などがあり、台湾が親日であることは知ってはいたものの実際に目にすると、とても感動しました。

今の日本人、特に私たちのような若者は豊かな日本に生まれ、何不自由なく生活してきました。そのため将来に対する見通しを持てず、現状に対する危機感を持ちにくくなっています。今後、もっとグローバル化が進んだ時に、周りの国から取り残されることがないように頑張らなければと感じます。また、いろいろな歴史があっても日本に親近感を抱き、あたたかく接してくれる台湾の人々に対して、自分も恥ずかしくない生き方をしていきたいと思います。

成功大学での学生との交流で太陽さん（成功大学学生）から、
中国語での挨拶を教えてもらった

○海外体験学習プログラム／スリランカ民主社会主義共和国【春季】

■参加学生	
西田　知世（法学部　法律学科　3年次生）	大村明日香（法学部　法律学科　1年次生）
大井　佑香（政策学部　政策学科　1年次生）	井道　友士（国際学部　国際文化学科　1年次生）
太田　晃人（農学部　食料農業システム学科　1年次生）	
■テーマ、企画団体	
「スリランカ　歴史と暮らしに触れる旅　～手づくり紅茶とホームステイ～」 特定非営利活動法人　JIPPO	

■行程　2019年2月21日（木）～3月1日（金）　9日間

日　程	時　間	活動内容	場　所
2月21日(木)	9：00	関西国際空港集合	コロンボ
	11：00	関西国際空港発	
	22：10	シンガポール乗り換え	
	23：55	バンダーラナーカヤ空港着【カタマラン・ビーチ泊】	
2月22日(金)	13：00	コロンボ市内見学 コロンボ国立博物館 ピリヤンダラへ移動 ホームステイ先へ【ホームステイ先宿泊】	ピリヤンダラ
2月23日(土)	終日	ホームステイプログラム【ホームステイ先宿泊】	ピリヤンダラ
2月24日(日)	10：00	ホームステイ先から集合 専用車にてベンガラへ移動	ベラガラ
	夕食後	振り返りの会 【ディスカバリーリトリートブラックウッド泊】	
2月25日(月)	午前	専用車にてハルドゥムッラへ移動 スリプスパラマヤ仏教寺院表敬訪問 ニードウッド農園見学	ベラガラ
	午後	紅茶工場見学　昼食 プランテーション住宅見学 茶摘み体験 振り返りの会 【ディスカバリーリトリートブラックウッド泊】	
2月26日(火)	終日	手づくり紅茶ワークショップ ワンゲディ・ペコ生産者との交流会 ローカルレストランで昼食 振り返りの会 【ディスカバリーリトリートブラックウッド泊】	ハプタレー
2月27日(水)	7：30	専用車にてマータレーへ移動 スパイスガーデンで昼食 ダンブッラ石窟寺見学	シーギリヤ
	夕方	シーギリヤへ移動 振り返りの会【エコーシーギリヤ泊】	
2月28日(木)	朝	シーギリヤロック登頂 ホテルにて着替え　昼食	シーギリヤ コロンボ
	午後	専用車にてネゴンボへ移動 ローカルレストランで夕食 バンダーラナーカヤ空港へ移動	
	22：30	チェックイン　出国手続き	
	24：45	出発【機内泊】	
3月1日（金）	14：05	シンガポール乗り換え	
	21：20	関西国際空港着 入国手続き、解散	

西田　知世
（法学部　法律学科　3年次生）

今回のスタディツアーで見学させてもらったプランテーションでの光景の多くが、印象深いものであった。山間部で重機が入れないという弱点を逆手に取った有機紅茶づくりは非常に重労働である。次の収穫のために新芽を摘みすぎないよう、お茶の木を雑に扱わないよう細心の注意を払いながら、ノルマ付きの労働をしなくてはならない。慣れというだけではできない、困難な仕事である。常にシンハラ人と差別されているにもかかわらず、一生懸命働く労働者のタミル人の勤勉さや忍耐強さも感じることができた。プランテーションという閉鎖的な空間のなかでありながらも、大人も子どもも友好的で、リラックスした雰囲気があり、居づらく感じることはなかった。

1日8時間働く彼女たちの子どもの世代は、現地で大学に進学できるほどになりつつあると聞く。シンハラ人とタミル人の、埋まらない溝と固定されてしまった階級が少しずつではあるが解けてきているのではないだろうか。

一つ一つ手摘みで紅茶を収穫するタミル人の女性

大村　明日香
（法学部　法律学科　1年次生）

私はこのスタディツアーで日本では経験できないことをたくさん経験した。プランテーションの見学では、回収が追いつかず積まれたままになっているゴミの山、ガスが使えずに火を起こして料理する姿など、豊かとはいえない暮らしを目の当たりにした。JIPPOの高木さんから、「プランテーションの人々は法律や政策、外交などに振り回されて生きてきたため自分の意思を持てなかった。自分で作った紅茶さえも飲んだ事がなかった。」という話を聞いたのがとても印象に残っている。普段私が当たり前のように得ている自由がプランテーションの中では当たり前ではないことを知った。日本円にして、一日500円程度の賃金で18キロもの紅茶の葉を積む仕事は、物価等を考慮しても、生活できる賃金ではなく、仕事量に見合った賃金とも到底思えなかった。プランテーションの子どもたちは大きくなると出稼ぎに出たり、他の仕事に就いたりと、プランテーション内の人手不足も問題である。人手不足と労働環境、それによる製品の質の低下こそが悪循環に陥る原因である。政策や法律等だけでない国民の意識の問題でもあり、複雑な問題である。根本的な解決には長期的な活動が必要であることを感じた。

プランテーションの子ども達と紙飛行機を通じて交流を行った

大井　祐香
（政策学部　政策学科　1年次生）

スリランカで過ごした9日間、毎日が私にとって学びの連続でした。その中でも特に紅茶作り体験はとても貴重な体験でした。また、プランテーションの中にある幼稚園や労働者の方々の住居を訪問し、経営者の方の家で紅茶産業の苦労やその将来についてお話を聞いたりしました。ただ紅茶がどのように作られているかを教えてもらうだけでなく、衰退していくスリランカの紅茶産業を通して見えた経営者の方々、労働者の方々それぞれの苦悩に深く考えさせられました。スリランカと日本は距

私を受け入れてくれたホストファミリー
おもてなしの文化が強いと感じた

離的にもとても離れていて似ていないように見えますが、農業人口の減少、衰退など抱える課題には共通していることが多くあり、決して他人事ではないと感じました。

馴染みのない国で、行く前は不安も大きかったのですが、人々は温かく、食事も紅茶もとても美味しく、様々なことを学べて本当に行ってよかったと思います。「たくさん学んだ」と一言で言ってしまっていますが、現地で自分の目で見て体感するからこそ得るものが大きいのだと経験して分かりました。学生の間にこのような貴重な体験をさせてもらえたことに感謝しています。

井道　友士
（国際学部　国際文化学科　1年次生）

私は今回のJIPPOのスタディツアーに参加できて本当に良かったと思います。それはJIPPOに関わる方々が今までの活動で現地の方々と信頼関係を築いてきてくださったおかげなので、そのことにまず感謝したいと思います。

このツアーで私はスリランカについて、メディアを通してではなく、自分の直接触れた国としてたくさんのことを知ることができました。その中でも紅茶農園で見聞きしたことが強く印象に残っています。労働者の過酷な労働環境を直接目にすることができ、さらに管理する側が考えていることを聞くことができたことはとてもよかったと思います。これからの紅茶産業の展望を聞くことができ、紅茶を乾燥させるための新しい機械を動かす瞬間に立ち会うこともできました。反面、その機械を安定して動かすために必要な電力の問題が残っていることも分かりました。これからもJIPPOを通してこのプロジェクトの進捗を見守っていきたいと思います。

茶葉の手摘みの仕方を教えてもらっている

太田　晃人
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

インドの右にある島国、その程度しかスリランカのことを知りませんでしたが、9日間でスリランカの歴史や文化、生活など様々なことを学びました。特にホームステイではスリランカを肌で感じ取ることができました。戸惑うことも沢山ありましたが、日本との違いを生活の中で体験できたことは貴重であり、ホストファミリーには本当に感謝しています。

スリランカは仏教徒が多く、老若男女問わず信仰が強いと感じました。移動中もたくさんの寺院があり、滞在中にいくつかの寺院を訪れました。私が知る日本の仏教とは違うように感じたのですが、現地の方に教えてもらった仏教の教えはやはり大学で習ったものと同じだったので、本質は同じなのだとわかりました。

あっという間の9日間でしたが、様々な体験、現地の人たちとの交流は、自分の人生の視野を広げてくれたと思います。

ホームステイ先の家族との記念撮影

事　業　名	体験学習プログラム報告会
日　時	2018年度　夏季：2018年10月23日（火）18時00分～19時00分（瀬田） ：2018年10月23日（火）12時25分～13時05分（深草） 2018年度　春季：2019年　4月25日（木）18時00分～19時15分（深草）国内2体験 2019年　4月 26日（金）18時00分～20時10分（瀬田）国内海外合同 2019年　5月20日（月）12時30分～13時10分（深草）海外2体験
場　所	2018年度　夏季：深草キャンパス　和顔館　アクティビティホール ：瀬田キャンパス　2号館102教室 2018年度　春季：瀬田キャンパス　6号館プレゼンテーション室 深草キャンパス　和顔館　アクティビティホール
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2018年度夏季：64名、2018年度春季：115名

1. 経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、誰でも報告を聴ける形で実施しました。

2. 概　要

参加した学生が、プログラムごとにそれぞれの体験を通じて学んだことを報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、スタディツアー企画されている NPO 団体、受け入れをしていただいた団体の方にも参加いただきました。

3. コーディネーター所感

プログラムに参加した学生は、それぞれの体験を通じて様々なことを感じ、そこから気づきや学びを得ています。プログラム終了後に行う事後学習会では、各々の思いを共有し、この報告会に向けた準備をすすめ、聞いて下さる方に伝わるようにまとめる作業を行います。学び、感じたことを仲間と共有し、さらに、報告会に来ていただいた方に伝わるように写真や、音楽、動画を使って短い時間にまとめています。ぜひ、多くの方に来ていただきたい報告会です。

	訪問地・参加者人数	テーマ
18年度　夏季	中華人民共和国 参加者：3名	黄土高原スタディツアー 中国緑化協力の旅
	インドネシア共和国 参加者：4名	ボルネオ島エコツアー 森の中でのホームステイ
18年度　春季	台湾 参加者：5名	学生、市民と歩く台湾エコツアー
	スリランカ民主社会主義共和国 参加者：5名	歴史と暮らしに触れる旅 ～手づくり紅茶とホームステイ～
	滋賀県高島市 参加者：15名	人と人、人と自然 ～エコツーリズムを通して「つながり」を学ぶ～
	福島県 参加者：15名	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉